

インドネシア・ミナンカバウ人の身体技法 に関する映像人類学研究

文化科学研究科・比較文化学研究専攻 村尾 静二

インドネシア・ミナンカバウ人の身体技法に関する映像人類学研究

文化科学研究科・比較文化学専攻 村尾 静二

マレー文化圏には、身体技法に基づく護身の技が広く分布する。その名称は各地域により異なり、型や動き、その目的や社会的意味づけも一様ではない。

本研究では、その源流の一つを築き、実践者の遍在性および潜在的な層の厚みにおいて他の地域を凌ぐといわれる、インドネシア、西スマトラのミナンカバウ人社会を調査地を選び、シレという名のもとに伝承されている身体技法を調査対象とする。

撮影調査を主としたフィールドワークを行い、自らもその修行に参加することにより、シレをかたちづくる型と動きを丹念に映像記録し、身体や時空の使い方に着目するなかでその体系をとらえる。また、技を狭義の意味に限定することなく、その実践や伝承が広く社会のなかに浸透する身体技法をとらえることにより、当地のアダット（慣習）や宗教実践といかなる関係を築いているのかを日々の修行や儀礼の観察を通して考察する。

このような意図から、調査場所にはミナンカバウ人のイスラーム礼拝所スラウを選んだ。インドネシアは世界最多のイスラーム教徒を擁する多民族国家であり、なかでも西スマトラのミナンカバウ人は、スマトラ北端のアチェ人、西ジャワのスンダ人、南スラウェシのブギス人やマカッサル人とならび、イスラームの教義への信仰心がことに強いことで広く知られている。

ミナンカバウ人の宗教実践は二つの場を中心として日常的に行われている。一つは公設の礼拝堂ムスジッド（モスク）であり、もう一つは各母系氏族が建造・運営する礼拝所スラウである。スラウでは、イスラームの戒律が神秘的な側面も含めてより深く実践され、シレの修行が行われる。また、ミナンカバウ人は、世界最大規模の母系制社会を維持していることでも知られているが、アダットに基づくこの伝統的な社会制度がイスラーム法や現代社会と直面するなかで生じる諸問題はスラウにおいて日常的に議論され、整合を図るなかで新たな適応策がとられることになる。このように、スラウとは個人の信仰と社会、身体技法とイスラームの戒律を、宗教実践を基盤として結合する、特別な場として機能している。

以上から、本研究の目的は（１）技をてがかりとしてシレの仕組みを把握するとともに、シレという身体技法を、スラウを舞台として展開されている個人・社会・宗教の相互作用のなかに位置づけ、日々の修行や儀礼の撮影調査を通してその文化的意味を明らかにする。そして、（２）これらの作業を民族誌映画の制作を通して実現することにより、文化人類学・異文化研究の新しい分析モデルの可能性を探ることにある。